慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文明社会とは何か : ヒュームにおける社会科学の特質とその形成 : 坂本達哉『ヒュームの文明社会』, 創文社, 1995年をめぐって
Sub Title	What is the civilized society? : the nature and formation of social sciences in the thought of David Hume
Author	田中, 秀夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1997
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.3 (1997. 10) ,p.660(192)- 681(213)
JaLC DOI	10.14991/001.19971001-0192
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19971001-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」90巻3号（1997年10月）

書評論文

文明社会とは何か——ヒュームにおける社会科学の特質とその形成

——坂本達哉『ヒュームの文明社会』，創文社，1995年をめぐって——

田　中　秀　夫

わが国でヒューム研究が本格的に始まったのは，他の思想家についても多かれ少なかれ同じであるが，戦後になってからである。そして過去50年ほどの間に，とりわけ最近になって，ロックやスミスには比すべくもないけれども，ヒュームについてもかなり多くの論文が書かれ，相当数の書物が出ている。研究が進むに連れて，思想家の思想自体もその形成過程も，より詳細に分析され，研究水準があがるとともに，例外なく研究の文脈も複雑になってくる。さまざまなジャンルの専門家がそれぞれの専門学の立場から思想家のテクストに光をあてるから，専門化が進めば進むほど，思想家の全体像を再構成する作業は困難となる。このような困難は啓蒙思想家の研究の場合は著しい。

ヒュームは18世紀のスコットランドが生んだ哲学者であり，歴史家であり，政治経済の思想家であり，文芸評論家でもあった。当時の哲学者は広いジャンルにわたる仕事をしたのである。そもそも当時の知識人（man of letters），学者（philosopher）は固定した専門分野の垣根をもたなかった。

専門分野をもつ現代の研究者は，自らの専門的関心にしたがって，ヒュームの思想を対象とする場合も，限定された視野から接近することが多いが，社会思想史という学問分野の専門家の場合は，自ずと総合的にヒュームに接近することになる。したがって，とりわけ啓蒙思想の研究にあっては，社会思想史家に好都合な事情が存在するといえよう。本書の著者（以下，著者とは坂本氏を指し，筆者は田中を意味する）は，社会思想史家の特徴を遺憾なく発揮した。

戦後の研究史をわが国の業績を中心に少しふりかえりながら，本書の批評をする際の前提条件を明らかにしておこう。

1　戦後日本のヒューム研究

哲学プロパーの業績は省略するが，戦後いちはやく哲学者山崎正一の『ヒューム研究』（1949）が出た。これはヒュームについての伝記であって，ドイツ観念論哲学の研究者で

あった山崎が，戦中に行なったロック，バークリ研究のなかで，視野を広げる必要を痛感して，書いたものである。山崎の意図は，カント研究の前提としてヒューム認識論に取り組まなければならないということにあったが，そのために準備的な仕事としてヒュームの著作と生涯の展望を得ておきたいということであったという（「あとがき」による）。したがって，山崎は，戦後を迎えてイギリス哲学研究に転じたということではなかった。

しかし，山崎は「市民社会」の思想家としてヒュームを描くことによって，哲学界に新風を送ろうとしたように思われる。この仕事は，自らも否応無しに組み込まれていた戦前の思想界，ドイツ観念論の圧倒的影響下にあり，ファッシズムに屈伏した哲学界の（自己）批判を意味しなかったであろうか。他方で，この時期に，大槻春彦によるヒュームの大著『人間本性論』の全訳（1948-52）も着手された。

ここでの山崎は，しかしながら，古典的なグリーン，グロース（Green, Grose）の『ヒューム著作集』の解説やバートン（John Hill Burton）の『デイヴィッド・ヒュームの生涯と手紙』に依拠する度合いが比較的大きく，さほどオリジナルな仕事を成し遂げたとは言えない。また，モスナーによる伝記は比較的早く出版された（1954）が，英米においても新しいヒューム研究が生まれるのはまだしばらく先のことであった。英米の研究から刺激と示唆を受けずに，高い水準の研究を実現することは，研究の蓄積の薄い――戦前にはほとんどなかったと言って過言ではない――わが国のヒューム研究ではほとんど不可能であり，その意味からも戦後しばらくは研鑽を積む時期であった。

ヒュームについての本格的な研究が，一見したところしばらく途絶える――論文は書かれたが，ヒュームについてのモノグラフは20年余り出なかった――のは，このことと関わる。しかし，ヒュームは保守的な思想家であるという通念がかねてから存在していたので，とりわけ，戦後改革の時代から当分の間（おそらく高度成長，あるいは大学紛争の時代まで）は，認識論プロパーの研究は別として，ヒュームに多くの研究者の関心が向かうことはあまり期待できなかった。

加えて，マイナーな理由というべきだろうが，戦後啓蒙の旗手のひとりとして颯爽と学界に登場した内田義彦の名著『経済学の生誕』（1953）に描かれたヒューム像のマイナスの効果もあったかもしれない。すなわち，内田はたんなる保守思想家というのではなく，ウィッグ全体主義の支柱となった思想家としてヒュームをとらえ，スミスの打倒対象とみなした。また，少しのちに小松春雄は，内田の影響は不明であるが，そのすぐれた著書『イギリス保守主義史研究』（1961）で，バークの先行者としてヒュームをとらえる立場から，ヒュームの社会経済思想の積極的な側面を評価しながらも，結論としてヒュームの保守主義を指摘して締め括った。明らかに内田の影響を受けながら，羽鳥卓也も力作『市民革命思想の展開』（1957）において，ロックの理論には市民革命の論理と国民主義の論理という二つの対立する論理が見られるとし，

市民革命の論理と精神はスミスに継承され，国民主義はヒュームに継承されたとした。この解釈は，それ自体として興味深いが，しかし極端なものであった。

このように，保守派ヒュームというとらえ方がこの時期には前面に出ていたように思われる。そして戦後の知識人，研究者は総じて保守思想を嫌い退けたから，ヒュームに本格的に取り組むというインセンティヴを見いだしにくいということがあったものと推察される。ヒュームに保守的な側面があることは否定できないし，それまでの通説がヒュームの社会思想の積極面を必ずしも十分に評価していなかった事情に鑑みればやむをえないともいえようが，しかし，内田のようにヒュームのポジティヴな側面を顧みず，ヒュームを打倒すべきいわばアンシャン・レジームの陣営の人間とすることは，当時の研究水準の制約があったとはいえ，行きすぎであった。巨匠のこのようなアンバランスな断定は，戦後のヒューム研究の出発にとって不幸であったと思われる。

こうして，しばらく書物の出ない時期があったが，この時期にはヒューム経済思想に若干の経済学者の関心が向けられた。小林昇のヒューム経済思想の周到な把握のほかに，ヒュームの経済思想の研究が田中敏弘や大野精三郎によって精力的に行なわれた。マンデヴィルについて，名著『マンデヴィルの社会経済思想』(1966) をもつ田中は，ハイエクからも示唆をえたが，主にロートワインの研究に導かれて，堅実な研究を積み重ねた。その仕事は経済学史の専門的視野にたつ『社会科学者ヒューム』(1971) にまとめられた。田中は，小林昇とともに，ヒュームの経済思想がスミスを先取りする自由主義の精神を基本にもつものであり，もはや重商主義と呼ぶべきものではないことを主張した。この田中の研究は，語られずとも，明らかに内田のヒューム理解を退けるものであった。

田中はヒュームの「インダストリ」の概念の生産力的含意を解明するとともに，ロートワインにしたがって，ヒュームが産業活動は人間に快活な喜びを与えるとみてとったことに，ヒューマニズムを嗅ぎ取った。商業社会が，あるいは近代社会の原理としてのインダストリ――田中はそれに産業活動という広い語義をもつ訳語をあてた――が，労働大衆に人間的喜びを与え，人間性の実現を可能にするというヒュームの洞察が，こうしてクローズ・アップされた。そのことには，同時に，敗戦の焦土からの「生活の再建」を推進した勤労という戦後的価値――大ブリテンでは18世紀に実現していた価値感に，戦後日本はようやく，あるいは改めて到達したということを意味する――への田中自身の批判的コミットメントがなかったとは思えないが，どうだろうか。やがて坂本も本書でヒュームの思想のこの側面を力説することになる。

しかしながら，経済学史からするヒューム研究にはそもそも大きな限界があった。すなわち，専門学としての経済学史の視野からは，マンデヴィル，ヒューム，スミスは自由主義経済認識の直線的発展の系譜として，一列に並んでしまう。これを経済学史におけるウィッグ史観の問題と名付けよう。このような単

調さあるいは単線的把握は，理論史に傾斜したタイプの経済学史の手法の特徴であり，この理論史の手法は研究者の視野を制約するものともなっているが，田中もこれを免れてはいない。田中もまたヒュームとウォレスの人口論争を取り上げたが，両者の文明社会認識の差異を深く掘り下げることはしていない。学史研究のこのような単調さから脱出する道のひとつは，パラダイム論，あるいは古い言葉をもちいるなら，類型論に求めることができよう。この問題を掘り下げて考察するのはここでの課題ではないけれども，経済学史におけるウィッグ史観を脱却する試みは，例えば，竹本洋のステュアート研究（『経済学の創成』1995），大森郁夫の『スミスとステュアート』（1996）にみることができるであろう。ただし，ステュアートの経済学体系とスミスの経済学体系を異なるパラダイムとして，対等のものとしてパラレルに評価することには疑問がある。ここでは歴史的差異が理論的枠組みの差異に解消されている。歴史の理論への還元というこのような理論主義，理論絶対主義――それは結局，論理主義に帰着する――は，歴史研究の否定に，やがては理論の貧困に導くであろう。

2　フォーブズ・テーゼの衝撃とポーコックの影響

しかしながら，実証派の田中は，英米の研究のフォローにも怠りがなく，やがて自らの視野を広げるべくフォーブズの研究を詳しく紹介する論文を書いた。スミス，ミラーの政治社会思想の特徴を「科学的ないし懐疑的ウィッグ主義」として理解するフォーブズのテーゼは，最初の提唱からすでに40年が経過した。フォーブズがその概念にヒュームも組み込んでから数えても20年以上が経った。このフォーブズの概念は今日でも，なお多くの研究者が評価するものである。田中はそのレヴューを収録した自らの新しいヒューム研究を，のちに『ヒュームとスコットランド啓蒙』（1992）にまとめた。フォーブスの仕事がわが国のヒューム研究にとって，共通の知識となったことには，田中の貢献が大きい。

実際，フォーブズのヒューム研究は画期的なものであり，その『ヒュームの哲学的政治学』（1975）は文字通り名著であった。フォーブズは，ヒュームを保守主義者ととらえる通説から救い出し，当時の大ブリテンの政治社会論争のコンテクストに照らして，ヒュームがいかに抜きんでた政治認識，社会認識をもっていたかを悉さに解明し，ヒュームを建設的な政治思想家，社会思想家として把握してその復権をはかったのである。その影響は実に大きかった。フォーブズにおとらずその後のヒューム研究に大きな影響を与えるポーコックの傑作『マキャヴェリアン・モーメント』も，同じ年に出版されたが，それは偶然の一致である。

その後，しばらく間をおいて，斬新なヒューム研究を出したのは大野精三郎である。大野の『歴史家ヒュームとその社会哲学』（1977）は，ポーコックのシヴィック・ヒューマニスト・パラダイム論，クラムニックのボリングブルック研究，フォーブズのヒューム研究などを吸収して，ヒュームの社会思想家

としての全体像を，18世紀の経済論争，歴史論争というイギリス社会思想史のコンテクストにおいて描き出した。大野はフォーブズにしたがって，ヒュームを名誉革命体制を擁護する懐疑的ウィッグとしてとらえた。

大野の研究の斬新さは，このように，英米の主要な研究をフォローし，消化したうえで，遂行された総合的学術研究の斬新さであった。古典的テクストの独断的読みではなく，同時代のコンテクストとの関連での読みを行なうこと，しかも英米の最新の研究成果を広く学んで吸収し，研究史自体が提示しているコンテクストを十分に自覚して研究をすすめるという手法が，ここでいう総合的学術研究の意味である。幸か不幸か，わが国の大ブリテン思想史研究は，英米の研究を参照することなしには，順調な発展をおおよそ期待できない。いわば情報ギャップはそれほど大きいのである。（こう述べると反発も予想される。例えば，周知のように，丸山真男，大塚久雄，内田義彦たちの仕事は戦中になされたのであり，したがってその高度な成果は，英米の研究書の輸入途絶の意図せざる，予想外の帰結であったという事実は否定しがたい。しかし，それには特殊事情が関わっているので，それを一般化などできないだろう。）それは外国研究一般にあてはまることで，ことさら述べるまでもないのだが，しかし，この要件を十分に満たした研究が，遺憾ながら，少ないことも事実である。

こうして大野の努力によって，英米の研究に大きく遅れたわが国のヒューム研究は，そのギャップをかなりの程度埋め，英米の研究に接近する成果を生んだのである。しかし，大野においてもヒュームの『イングランド史』の研究はまだ摘み食いとの印象を拭えないことも指摘しておこう。

この時期の英米の18世紀大ブリテン思想史研究は政治思想史家がリードした。経済学をベースにする大野が，精力的にこうした英米の政治思想史家の業績を渉猟し，最新のヒューム研究を成し遂げたことは，後進への範となるべきものであった。すでに政治思想史家ポーコックもまた経済思想，社会思想への越境を試みていたが，大野は経済思想史家として政治思想への越境を試みた先覚者であった。

少し遅れて，これまたフォーブズに大きな影響を受けた舟橋喜恵の『ヒュームの人間の科学』（1985）が出た。舟橋が力点を置いたのはヒュームの「人間の科学」（基礎理論）と政治学（応用理論）との関連の解明であった。それとともに，とりわけ，舟橋は，フォーブズに導かれて，大野にもまして，ヒュームの大著『イングランド史』の解読と分析に大きな努力を払った。

ヒュームの『イングランド史』に先鞭をつけたのは，前述の山崎であり，次いで田中敏弘の『社会科学者ヒューム』であったが，本格的な『イングランド史』研究は舟橋から始まると言ってよい。けれども，舟橋はフォーブズの解釈から抜け出すことはできなかったように思われる。

3　スコットランド啓蒙への位置づけ

舟橋までの研究に欠けていたもののひとつが，スコットランド啓蒙という概念であり視

野であった。それまではパスカルの提唱した「スコットランド歴史学派」という概念がしばしばもちいられたし，その概念は18世紀スコットランドの一連の哲学的歴史家の仕事を把握するのにそれなりに有益であった。しかし，スコットランド歴史学派という学派が存在したわけではなかったし，哲学的歴史の著者たちは，多くが社会哲学者，社会思想家として，啓蒙の多様な思想と行動にコミットしていたという事情をより正しく把握するためには，もっと広い概念が必要であった。こうして採用されるにいたったのが，スコットランド啓蒙の概念である。

1967年の啓蒙思想国際会議ではじめて「スコットランド啓蒙」のセッションが設けられた。しかし，この概念が，学界に定着したのは，70年代半ば頃であると思われる。というのも，1970年に刊行されたフィリップスンとミチスン編の重要な論文集は，実質的にスコットランド啓蒙の研究であるにもかかわらず，未だ『改良時代のスコットランド』と題されていた。その少し後にスコットランド啓蒙の概念が一般的に認知されたことは，スクリブナーの思想史辞典が啓蒙の項目においてフランス啓蒙とスコットランド啓蒙を対等に取り上げた（1973）ことや，レンダルのアンソロジー『スコットランド啓蒙の起源』（1978）の出版などに示されている。しかし，影響力の大きかったのは，さらに後のキャンベル，スキナー編『スコットランド啓蒙の起源と性質』（1982）であった。

こうしてスコットランド啓蒙という概念の示唆に導かれて，ヒュームを研究する視野も開かれた。時期的には間に合ったはずの渡部峻明の力作『ヒューム社会哲学の構造』（1985）には，まだスコットランド啓蒙が視野に入っていないが，それは基本的に関心と手法の違いによるであろう。

すでに70年代に国際的なヒューム学会が結成され，ヒューム研究会議が開かれるとともに，Hume Studiesが刊行されていた。この学会の傾向は当初は哲学的なものであったが，次第に思想史的な研究もでるようになった。80年代半ばには，18世紀スコットランド研究学会が形成され，スコットランド啓蒙研究の一層の発展に大きな寄与をした。またこの頃から，英米のいよいよ盛んになってきたスコットランド啓蒙研究，スコットランド啓蒙との関連でのヒューム研究がわが国の研究者に熱心に読まれるようになるとともに，英米の学界との研究交流が密接になってきた。日本の研究者が積極的に国際学会に参加するようになったのも，この時期のことである。

このような流れのなかで行なわれた画期的な催しが，スコットランド啓蒙を中心テーマとする研究集会，1986年のIPSE CONFERENCESであった。筆者は参加できなかったが，著者はこれに参加している。主催者の一人，エディンバラ大学高等人文研究所のピーター・ジョーンズとこの研究所は，以来，スコットランド啓蒙研究と研究交流の中核的拠点となっている。

ところで，すこし遡るが，スコットランド啓蒙研究で，もっとも刺激的，挑発的，衝撃的な研究は，エディンバラやグラスゴウではなく，哲学と思想史の長い伝統を誇るオック

スフォードでもなく，ケンブリッジで生まれた。ホント，イグナチェフ編の『富と徳――スコットランド啓蒙におけるポリティカル・エコノミーの形成』(1983)がそれである。フォーブズに代表される自然法思想研究の伝統と，ポーコックとスキナーに始まる共和主義思想史研究の伝統が，ここで結合――あるいは緊張ある摺り合わせ――の試みを展開したのである。政治思想史の専門家を中心とするケンブリッジ・グループが，本書でメインテーマとして取り上げたのは，副題にあるように，スコットランド啓蒙における経済学(Political Economy）の形成のコンテクストであり，自然法的伝統とシヴィック・ヒューマニズムと経済学の関係であった。以後，シヴィック・ヒューマニズムがスコットランド啓蒙においてどのような役割を果たしたかの究明が，ケンブリッジ・グループを越えて，スコットランド啓蒙研究のひとつの焦点となり，盛んに論じられることになる。シャーの『スコットランド啓蒙における教会と大学』とロバートスンの『スコットランド啓蒙と民兵論争』というふたつの傑作（ともに1985）はその格好の例である。

重要なことは，ケンブリッジ・グループが思想史の洗練された精緻な方法を生み出していたことであり，それがかれらの優れた思想史研究を可能にしていたことである。かれらの思想史の方法はスキナーのコンテクスト主義とポーコックのパラダイム論という若干ニュアンスの違う二人の巨匠の手法を両極とするが，かれらは共通にテクストの分析を言語の意味分析――ここではオースチンなどに多くを学んでいる――とテクストの歴史的な分析を通して遂行する。すなわち，著者の意図とテクストの関連を問い，ヴォキャブラリーの継承と革新を明らかにし，テクストを論争のコンテクストのなかに位置づけつつ理解しようとする。したがって，著者の意図の明確な把握と，論争のコンテクストでテクストが結果としてもつ多様な歴史的意味を解明しようとする。この手法が排除するのは，比較，類推などの超越的な手法である。テクストの表面的類似は，それだけでは，問題にならない。それだけなら哲学的分析に委ねればよいのである。このような手法は，本書の著者ももちろん心得ている。

こうして英米におけるヒューム研究，スミス研究とスコットランド啓蒙研究は，イングランド思想史研究とともに，この20年間に隆盛を迎え，大きな飛躍を遂げたのである。

そのような交流の成果――未だ一方的な摂取を越えるものではないが――は，ホント・イグナチェフ編著『富と徳』，ポーコックの『徳・商業・歴史』，あるいはウィンチの『アダム・スミスの政治学』などの翻訳となって現れたり，田中正司や星野彰男，篠原久，新村聡，只腰親和のスミス研究や天羽康夫のファーガスン研究などに示されている。

わが国において，逸早く，スコットランド啓蒙という概念枠組みとの関連を視野にいれてヒュームを論じたのは，書評者の『スコットランド啓蒙思想史研究』(1991）である。この書物はヒュームのモノグラフではなかった。しかし，補足しておけば，この書物でキーパースンとしてもっとも重要な役割をはた

しているのは実はヒュームである。著者はわたしの書物に書評を書き，コメントを寄せたが，それについてはのちに少し触れることにする。

今ではすでに膨大な蓄積となっている，こうした新しい研究動向は，ヒューム研究にとって必要なかぎりで，本書の著者が飽くことなく熱心かつ周到にフォローするとともに，それに明快な整理を加えて，その理解に大いに貢献しているものでもある。研究史を無視した独断的解釈は，アカデミックな仕事としては通用しないという自覚は，本書の著者のものである。

スコットランド啓蒙との関連でのヒューム研究は，新たに付け加わった情景であるが，この新動向は，もちろんのことながら，ヒュームをもっぱらスコットランド啓蒙との関連でのみ解釈すべきだという主張を意味するものではない。イングランド啓蒙との関係，ヨーロッパ啓蒙との関連での研究も重要であることをこれは否定しないし，また自然法思想のコンテクストでのヒューム研究を抽象的だからという理由で，退けるわけでもない。

今はスコットランド啓蒙との関連についてふれただけであるが，最近のヒューム研究は実に活発であって，多様な関心と視角，さまざまな対象とトピックの設定のもと，厖大な業績が生まれている。『イングランド史』についてもフィリップスンのモノグラフをはじめとして，キャパルディ＝リヴィングストン編著など，水準の高い本格的な研究が現れている。ノートン夫妻の『ヒューム・ライブラリ』(1996) は，残念ながら，本書には間に合わなかった。

本書『ヒュームの文明社会』は，こうして，書かれるべくして書かれた。(本書の刊行とほぼ同時期に神野と板橋のヒュームについての労作も出たが，これについては立ち入らない。)

4　市民社会と文明社会

以上のような研究史の前提と背景を想起するとき，では本書は，何を実現したか。本書の成果はどのようなものであるか，疑問はどこにあるか，残された課題はなにであるかについて以下述べることにしよう。

本書は大きく三部に分けられ，全体への導入部として序章がおかれている。三部はほぼヒュームの仕事の時系列的展開に即して構成されている。第一章は『人間本性論』，第二章は『道徳・政治論集』(この二章が第一部)，第三章はヒュームのヨーロッパ体験，第四章は『政治論集』(この二章が第二部)，第五章は『イングランド史』，第六章はヒューム－ウォレス論争を扱っている。序章から第二章までが新稿で，第三章以下は既発表の論文の再構成で，全体としては約六割が新しいとのことである。

序章は，ヒュームの「人間学」体系の独自性，スコットランド啓蒙という二つのトピックを説明したあと，「本書の主題と方法」を説明している。

ヒュームは哲学者，社会科学者，歴史家という三つの顔をもっているが，本書は社会科学者としてのヒュームを主題とする。「社会科学者としてのヒューム像を解明」する不可

欠な手続き上，哲学者，歴史家としてのヒュームも扱うが，「全体像」の解明は意図しない。「本書は，少なくとも三つの顔をもつヒュームの横顔を描き出す試みにすぎない」と著者は謙虚に語っているが，しかし著者は自信をもって，この主題に対して「ヒュームの文明社会」という基本的視角から接近することを言明する。その際，ヒュームの人間学の構想と文明社会論の関係をつねに意識すると言われる。それは，ヒュームの著作活動の出発点には，「人間学の方法理念があり，『人間本性論』以降の諸著作のなかで，そのプランを着々と実行していく」からである。

全体を通して主題となっているのは，題名にあるように，ヒュームにおける「文明社会」論の形成とその発展の解明である。

そのため，ヒュームの「文明社会」論を思想史的背景のなかに位置づけようとする努力が，とりわけ新稿の序章から第二章において行われており，この部分はヒュームに中心がおかれつつもスコットランド啓蒙思想史の濃密な叙述をともなうものともなっている。

さらに，これは全体を通して言えることであるが，ヒュームは名誉革命と合邦を所与とする大ブリテンの政治体制を比較史の視野をもって冷静に分析した社会思想家であることが，文明社会の概念の解明の内容ともなっているために，著者の議論は，スコットランド啓蒙を越えて，ヒュームを通しての大ブリテンの啓蒙時代の研究という側面をも併せもつことになっている。

このような側面をともなっているために，ヒュームに焦点をもつモノグラフにありがちな単調な分析ではおよそなく，ヒュームの社会認識の深い構造の開示に成功しており，知性の迫力を感じさせる著作となっている。

著者は社会科学者ヒュームの文明社会論を論じるにあたって，最良のヒューム研究を参照しているが，のみならず，スコットランド啓蒙研究の近年の研究動向についても，行き届いた，正確な説明を随所に折り込んでいる。優れた研究を発掘し，消化して，読者に伝えることは，研究の品質と客観性の証明ともなるし，そのこと自体が見識を必要とすることである。その意味で著者は，本文における聡明な議論においてと同様，研究史と研究動向の紹介においても，その優れた見識を遺憾なく披露している。文献と研究史からもヒュームとスコットランド啓蒙研究への格好の道案内となっているという意味でも，重要なことであるし，尊敬すべき研究態度である。

著者が「市民社会」ではなく，「文明社会」という言葉を採用したことは，重要である。ヒュームの社会理論，社会思想を「市民社会」論あるいは「市民社会」思想として論じないということには，いくつもの意味がある。まず市民社会は civil society の訳語であるが，著者も指摘するように (32)，ヒュームには civil society という用語法がほとんどない。ヒュームには civilized society という用法も少ないけれども，しかし civilized (nation, people, government, monarchy) は頻繁に用いており，civilization という名詞も文明の意味で用いている。ヒュームも視野にいれて「スコットランド学派」の「文明社会」論をわが国で初めて自覚的，かつ本格的に論じた

のは，佐々木武である。筆者もまた佐々木論文から強い知的刺激を受けたが，著者が佐々木論文に始まるこうした問題意識の系譜を直接に引き継いでいることは，明らかである。

著者は，こう述べている。「アリストテレスからプーフェンドルフ，ロックまでのヨーロッパの思想史において，「市民社会」の概念は，古典古代のポリス共同体を原型とする自由・平等な市民が構成する政治的共同体のことを意味していた。ところが，戦前以来の日本の思想史研究，いや，その社会科学全体においては，ヘーゲル，マルクスの強い影響下に，こうした伝統的な「市民社会」概念が，第一に，人間社会の政治的ではなく経済的基礎構造として解釈し直され，第二に，すぐれて商品経済的でありながら，身分的・階級的な貧富の格差からも解放された自由・平等な諸個人の社会関係として，ヘーゲル，マルクスにおける以上に理想化されて定着することになった。しかし，このような特殊日本的な市民社会概念は，日本の社会科学史研究にとっては有意義かもしれないが，一八世紀のイギリスやフランスの思想や社会科学を研究する者までが，そうした概念を用いなければならない理由はないであろう。」(372) 日本のコンテクストで成立した概念を外国研究に不用意に持ち込むことは慎まなければならないが，「市民社会」の概念は和製ではないという思い込みが日本の学界にあったことも事実である。

特殊日本的な「市民社会」の概念が，自由・平等な経済社会を意味したという著者のこの把握は，単純化しすぎであるとしても，大方の傾向としてはこの通りであっただろう。しかし，戦後の市民社会論については，もう少し，ニュアンスをみたほうがよいというのが，筆者の意見である。

戦後日本における「市民社会」の概念は，戦後啓蒙の指導理念としてニュアンスと膨らみのある用いられ方をした。まずそれはホッブズ，ロック，スミス研究において近代社会の意味で用いられたが，ホッブズ，ロック研究の場合は，自由主義社会というより民主主義社会というニュアンスが強かったのに対して，スミス研究の場合は経済社会＝商業社会の別名として用いられる傾向があった。

第二にヘーゲル，マルクスを通して，基本的にブルジョア社会の意味で使用されたが，平田清明が代表するように，マルクスにおいても市民社会は形式的に平等な民主主義社会を意味し，したがって歴史貫通的な意味をもっているという主張もあった。

内田義彦の場合は，市民社会の価値法則自体が労働日をめぐる闘争という労働者階級の実践を通してしか実現しないという――『資本論の世界』(1966) における――強調が示すように，市民社会の概念は，たんなる形式的に平等な民主主義社会というものにとどまらない概念であった。

カント研究からも市民社会の概念は問題になった。カントは世界市民社会における世界市民の実践哲学を説いたが，カントにおいては市民＝公民の政治的行為は自由な行為としての義務論に基礎づけられた。このカント政治哲学の影響は南原繁を通して丸山真男に影響を与え，市民社会思想家として圧倒的な影

響力をもった丸山が制度と主体の相互関係を問題にして，自立した人間の自立した実践の確立を日本思想の課題とみていたことに反映しているように思われる。

内田，丸山においては，大塚においてもそうであるが，近代社会の形成は，人間の日常の自覚的な実践——主体的行為——を通してしか可能でないと理解されていた。かれらは講座派の遺産とマルクス（主義）に精通し，多くの思想の要素を継承していたが，にもかかわらずかれらにおいては，市民革命も場当たり的な革命的実践の産物としては理解されていなかった。ウェーバーの歴史認識と分析視角からも強い影響を受けていたかれらは，社会を形成する主体——市民的人間の形成，エートス——の問題抜きに，自動的に変革が起こり，変革が起こりさえすれば，よりよい社会が自動的に生まれるとは，考えなかった。戦後啓蒙の旗手たちが，社会主義革命ではなく，市民社会を問題にしたのは，そのような主体の実践的能力——知と徳——の重要性をみていたからである。（ちなみにウェーバーのエートスの概念は，現代の思想史家たちの注目しているヴァーチューの概念と大いに重なる要素がある。山之内靖がウェーバーにおけるニーチェの影響を追求して辿り着いた古典的戦士的伝統は，ポーコックの言葉で言えばシヴィック・ヴァーチューの伝統に他ならない。）

その意味で，戦後啓蒙の旗手たちの市民社会の概念には，今日のシヴィック・ヒューマニズムに通じる要素があるし，また現代的—将来的意義をもち続ける可能性があるというのが，筆者の理解である。しかし，そのことも また，ヒュームをふくめてスコットランド啓蒙の社会思想を論じるさいに，不用意に市民社会の概念を用いることができない理由のひとつである。

以上は筆者の理解するものであるが，著者は「あとがき」で述べている——本書が「市民社会（civil society）」ではなく「文明社会（civilized society）の概念を前面に押し出したのは，ヒュームのみならず一八世紀ブリテンの思想家たちの中心的な問題は「市民社会」ではなく「文明社会」であったという基本認識による，と（371）。

著者は特殊日本的な市民社会概念とヒュームたち18世紀の文明社会の概念の決定的差異を端的に次のように指摘している。「第一に，18世紀の「文明社会」が私有財産と分業にもとづく市場社会，経済社会である一方で，何より，法の支配と正規の政府が樹立された政治社会として理解されていたことであり，第二には，日本の「市民社会」概念が，権利においてのみならず事実における「自由と平等」の理想を核心にもつ平等社会としての性格を色濃く帯びているのに対して，18世紀の「文明社会」は階級的・身分的格差をふくむ階層社会として肯定的に理解されており，権利としての自由と平等を重視することはあっても，事実としてのそれを問題にはしなかったということである。」（372-3）

文明社会の構造の理解は，著者の述べる通りであった，と筆者も思う。しかし，問題はそれですべてではない。このような文明社会のなかでの，様々な人間集団のうちのある部分の，実際の行動様式については，ヒューム

もスミスも，ずいぶん批判的であったことも事実である。文明社会の内部における実際の人間の行動様式の批判的分析もヒュームの文明社会論の一部を成しているが，社会科学の形成に着目する著者は，この側面は捨象している。

5　本書の成果

さて本書の本論についてであるが，大略，次のような点が特筆に値すると思われる。

1，ヒュームの人間学と社会科学の密接な関係を，方法に着目して，きわめて明快に説明した第1章は，啓蒙的意義の大きい章であるが，その細部に立ち入ることは割愛する。一言付言すれば，ヒュームの人間学と社会科学の関係は，かつて，舟橋喜恵が執拗に追究したトピックであって，著者のここでの説明は舟橋を継承するものとみることができる。

2，『道徳・政治論集』の文明社会論を，アディスンの文明社会論の受容と克服というトピックに即して，掘り起こしたこと，またフォーブズにしたがってではあるが，ヒュームの名誉革命体制認識が，通俗的なウィッグの神話にではなく，学問的な統治構造，政体，政党分析に基礎を置いて，それを自由な体制として支持するものであること――懐疑的ウィッグ主義――を明確に説いている。アディスンは参考になるものは邦語文献に少なく，香内三郎が少し触れている他にはアグニューの翻訳がある程度であって，著者のアディスン紹介は，わが国の欠落をうめるものである。

3，その際，フォーブズが重視した，ヒュームにおける「開明君主制」（政体）の概念の形成に著者も注目する。この概念自体は，類似物が，たとえば，ウィリアム・テンプルにもある（Cf. C. Berry, p. 152 note）が，その概念がヒュームにフランスにおけるそこそこ自由な文明社会の成立を認識させたのである。マキャヴェッリの国家（stato）が示すように，新しい言葉（概念）が新しい認識を実現することはよく知られている。新たに生まれ出ようとしている観念は言葉を発見してはじめて明確に成立するのである。この理論，すなわち「ブリテンと大陸ヨーロッパをいわば比較史的に，また，比較社会学的に相対化するヒューム独自の分析手法」は「ブリテンとヨーロッパという異質の歴史と構造とに共通する文明社会形成の基本的要素の析出」(132) を可能にする方法であった。

4，著者によれば，このような理論を生み出したものは『人間本性論』の正義論であって，『人間本性論』と『道徳・政治論集』が，このようにして，連結される。すなわち，「ヒュームは……政府が執行する所有権と契約の法の道徳的義務の源泉を，商業社会の安定的発展を保証するような正義の根本的諸規則（自然法）にもとめていたのであり，彼は明らかに近代自然法学の理論伝統に立っている」。これは，著者によれば，「所有の自然法を……実現する正規の政府（君主制と共和制）と，反対に自然法に逆らいこれを抑圧し破壊する政府（専制）との質的区別という開明君主制論の基本視点を生む原動力となるものである。」(140)

5，以上の三点の議論は明晰ではあるとし

ても，著者の独創とはみなしがたい。それに対して，『道徳・政治論集』以後『政治論集』までの十年間のヒュームの経験，戦争体験とヨーロッパ体験の分析は十分に独創的である。この時期のヒュームの足跡は，もちろん，モスナーの『ヒューム伝』もたどっている。しかし，その間の経験が「生活様式」の概念にヒュームを目覚めさせ，かくしてこの概念が開く視野において『政治論集』の経済発展をめぐる議論が成立するという著者の解釈は十分に独創的である。著者によれば，『道徳・政治論集』の開明君主制論は，究極的には自由な政府と専制政府の二元論という発想――通俗的ウィッグ主義の本質――に依拠するものであること，しかも西ヨーロッパにおいて開明君主政体自体から法の支配，国民の自由，商業と富裕が発生した事実を十分には説明できないことという欠陥がある。この隘路を打開するものが，生活様式の概念であった。

「若きヒュームは，ドイツやオーストリアを旅しながら，人々の生活様式と習慣こそが，国民性の多様性や富裕の格差を規定する根本要因であることの洞察を得た。『政治論集』は，こうした素朴な直観的洞察を，自由な労働の社会的交換を基礎とする文明社会の一般理論としての体系的把握にまで深めたものである。こうした文明社会の一般理論の諸前提のもとに初めて，……『イングランド史』における，特殊イングランドでの商業と自由の複雑な歴史的因果の解明が成立するのである。『道徳・政治論集』の開明的君主制の理論は，『政治論集』の経済学的文明社会認識を媒介として，『イングランド史』における生活様式の変革を起点とする絶対王政と市民革命の歴史分析に結実するのである。」(247-8)

ヒュームの社会認識において「生活様式」の概念が重要であるという見解自体は，フィリップスンがつとに提出していたものであるが，ヒュームにおける「生活様式」の概念の意義については，著者はフィリップスンを越えた認識に到達していると言えよう。

著者によれば，『政治論集』の経済論文は，生活様式の概念を軸とする分析によって「近代社会の成立過程」の歴史認識を展開していることが重要である。自然経済から貨幣経済への移行，自然的欲求から想像上の欲求への変化，共同体の解体にともなう技芸と産業活動の展開，農業・工業の二部門発展モデルなどは，この生活様式の概念を基礎とした理論的枠組みに組み込まれているのである。(239) 風土決定論と古代人口優位論をともに退けた『政治論集』は「固有の意味での経済論というよりも，文明社会の一般理論」(263) というべきものである。

6，著者は『イングランド史』の特質についても，一歩進んだ解釈に踏み込んでいる。ヒュームの『イングランド史』が単なる政治史ではなく「文明社会史」であるという認識は新しいものではない。ここでは「商業」と「自由」との関連というトピックを主題として取り上げて，ヒュームの『イングランド史』のテューダー朝，ステュアート朝の君主たちの政策が，生活様式の変革，国民の勤労，知識，自由の精神とあいまって，自由と商業の確立に寄与したという議論に著者は注目する。絶対君主はその権限が強大なだけに，ヒ

ュームのこのような見解に正当性があると著者はみている。

『イングランド史』のヒュームは，テューダー朝の君主たちの「賢明な執行権力」をもたらした歴史の原動力を，封建制の内部での奢侈的，生産的な生活様式の展開，大衆的な技芸と産業活動の開始にみた。イングランドの法と自由は，このような生活様式の変革のなかで生まれたというのが，核心的主張である。(283) 著者は「ヒュームは，テューダー朝→ステュアート朝→名誉革命という一連の歴史過程を，絶対王政の正規の権力執行に支えられた事実上の自由としての人格的自由から，正規の法律に裏づけられた市民的・政治的自由への発展過程として，はっきり認識していた」(281) ことを強調している。

この歴史過程は自動的な過程だったのではない。「商業社会と市民革命との関連を必然的なものとみる……理解は，むしろミラーなどに色濃く現れてくる通俗的ウィッグ主義の歴史観であって，ヒュームのものではない。彼は商業と自由との相互関連を論理必然的な因果関係としてではなく，歴史的な諸条件を媒介とする高度の蓋然性において捉えることによって，『イングランド史』における絶対王政と市民革命の歴史分析に導かれることになったのである。……ヒュームの説明において決定的に重要なことは，絶対王政の媒介的役割を過大評価することではなく，絶対君主の賢明な政策的対応それ自体が，生活様式の変革を基盤とする国民一般の知的洗練を前提して初めて可能であったという歴史的洞察である」(306)。

7，こうして著者は，「歴史における偶然と必然」という古来の難問に対するひとつの優れた回答をもヒュームを通して提出したと言えようが，このようなヒューム理解が登場したことに，歴史としての現在が示されているやに見える。あれほど強固に見えていたソ連邦は，ゴルバチョフという賢明な為政者の登場によって，解体した。それはだれひとり予想できなかった事態である。ヒュームが勤労だけでなく，知識というものの建設的役割になみなみならぬ洞察をもっていたということは重要である。ヒュームは典型的な啓蒙思想家である。啓蒙思想家とは畢竟，知識の力を恃む者に他ならない。啓蒙思想家は知，知識，学問，思想を過大に評価するものでは必ずしもないことは，かれらが理性の限界，人間の能力の限界に自覚的であったことと関係がある。しかし，かれらは知的ペシミストではなかった。わたしたちは，著者の叙述を通して，啓蒙思想家というものの実に冷静で，建設的で，人間の社会生活への大きな寄与を確認できるであろう。

8，最終章はヒュームとウォーレス（とジョン・ブラウン）の論争を扱っている。この三人の論争については，モスナーがほのめかしたことがあるけれども，明確に「名誉革命の危機をめぐる論争」として把握し，論争を経済論争として掘り下げた点で，著者の議論は大きなメリットをもつものである。本章は旧稿の再録であるけれども，論文としての分析の深さ，強靱な思考の持続と独創性をもって，筆者は本書の白眉であると考える。ウォレスは，通常は，近代社会の原理を明確に把握し

たヒュームの進んだ理論の前に屈した重商主義者とか，古代賛美論者とかとして，あまり評価されないのであるが，ここで著者は，ウォレスの優れた経済認識を析出し，再評価している。著者はウォレス＝通俗的ウィッグ説にたつが，著者が析出したウォレスの社会認識と経済理論は，通俗的ウィッグの枠をはみ出していると，筆者は考える。（永井論文には本章の触発がみられる。）

9，大略，以上のような成果をもたらした筆法鋭い分析を通して著者が把握したのは，ヒュームの「文明社会論」としての社会認識であり，そのような形をとったものとしてのヒュームにおける社会科学の形成である。ヒュームは社会の学問の転換を遂行した人物である。ホッブズ，ロックの社会契約説＝自然法的社会理論から経験科学としての啓蒙の社会科学の成立へと，社会の学問がこの時代——18世紀中葉頃——に大転換を遂げたことは，一般に知られているが，その転換のプロセスの具体的，内在的な理解，解明をおこなうことは，なかなかの難問である。経済学の成立問題もこの難問の一側面である。著者はヒュームに即してこの難問を解こうとし，本書で果たされたのはヒュームの社会科学体系の一部分であるとはいえ，見事に成功したといえるであろう。社会の学問の大転換は，近年の小林昇がステュアートに即してモンテスキューの契機を重視しつつ追究しているテーマであるし，筆者もまたスコットランド啓蒙の文明社会論へのモンテスキューなどの衝撃をたどりながら模索しているものである。

6　若干の疑問

本書のメリットは以上につきるわけではないが，それを列挙することはやめて，最後に若干の疑問を述べて教えを請いたい。

1，ヒュームは厳密な方法的一貫性を追求した，と著者は強調する。方法的一貫性が「三つの顔」をもつヒュームを統一するのだというのであろうか。あるいは文明社会論という枠組みが統一を可能にする装置だというのだろうか。この「三つの顔」をもつ男とは，著者お好みの表現であって，ほかならず，著者が筆者の『スコットランド啓蒙思想史研究』におけるヒューム理解を特徴づけるときに，かつて用いた表現であった（『社会思想史研究』第16号，1992年，179ページ）フォーブズの懐疑主義的ウィッグとしてのヒューム，ポーコックの共和主義的なヒューム，小林昇＝田中敏弘の学史的ヒュームが統一されていない，というのが著者の筆者に対する批判であった。筆者は法思想と政治思想，経済思想は，相互に関連しつつも，言語としてもパラダイムとしても本来的に差異があり統一（unification,unity）困難なものであるという理解に立つ。このような考えに筆者は次第に辿り着いたのであるが，ポーコックとスキナーの議論に出会って，いっそう強いものとなったことは否めない。

もとより方法的一貫性とか，哲学的基礎の一体性は別である。たとえば功利主義を基礎にする経済学や政治学，法学が成立しうることを，筆者は否定しない。しかし，他方また，

ヒュームのテクストは，中期の論文集の頻繁な改訂が示すように，必ずしもすべてが十分に練り上げられた完成度の高いものとは言えないという見解をとる。それは今もそうである。したがって筆者が著者を満足させることは困難だが，著者は本書を書くことによって筆者に投げ掛けた不満を解消したであろうか。

おそらく，統一性は，方法の一貫性と「文明社会」という統一的視野が提供しているというのが，著者の理解であろう。第一章ではヒューム思想のバック・ボーンをなす「人間学」の方法に焦点を絞り，ヒュームの思想の源流，ヒュームに流れこむ様々な思想の系譜をヒュームがどう批判的に摂取し，どのようにして自らの方法を構築したかが検討され，第二章以下では「ヒュームの人間学構想の上に次々と打ち出されていった彼の社会科学的諸著作が「文明社会」という統一的視野のもとに扱われる」と，著者は説明しているからである。あるいは，著者は，社会科学者ヒュームの人間学の構想を青写真とみなし，それに導かれたフィールド・ワークを通して長い時間をかけてできあがったものが文明社会像であるとも説明している。

このような説明に筆者は異論をもたないが，フォーブズのヒューム，ポーコックのヒューム，小林＝田中の学史的ヒュームの統一問題への回答としては不十分である。ヒュームの社会思想的著作が文明社会論であること，そしてそれが経験論的な学問の方法で書かれていることはだれも否定しない。

問題は，18世紀社会思想の，そして個々の思想家の著作に述べられた，それぞれの複雑な思想の内容の理解，その思想史的系譜と相互関連の理解にある。それをできるだけ少数のより普遍的な要素に還元して理解すべきかどうかである。18世紀思想は，その後に比べれば，思想はまだしも少ない要素に分類可能であろう。言語行為論に示唆されたコンテクスト主義は逆の方向に進む。啓蒙思想の場合，単純に，たとえば，キリスト教的伝統や自然法思想などに個々のテクストの思想を還元するという手法もあるが，他方，実に複雑，多様な思想の坩堝，混在，錯綜をコンテクストに即して一歩，一歩理解していくという手法——言語の政治学——も存在する。コンテクストは多様にありうるからテクストの理解は多様に拡散しうる。この場合，研究をどこで閉じるかという問題に逢着せざるをえない。直接の論争だけに絞るというのが，たとえば，ひとつの有効なアプローチである。

ヒュームについて言えば，自然法思想と，様々なジャンルにわたる自生的秩序の思想，共和主義との関係が，いかなる思想史上のコンテクストと関連において，摂取され，総合ないし折衷されているか，真にヒュームの独創とできるのは何であるかなど，多くの問題が後者の立場からは扱われることになるであろう。そして，実は著者もこの手法にしたがって，多くの知識をもたらしているのである。にもかかわらず，この点で著者の視野はいささか限定されすぎてしまった。すなわち，たとえば著者は重要なヒュームの論説「理想の共和国案」を不問にふしている。さらにポーコックとロバートスンのニュアンスのある共和主義とヒュームの関連理解について，著者

は注記しているものの，十分内在的な検討は行っていない。こうしてヒュームにおける共和主義の問題は，かならずしも十分な分析対象となっていない。おそらく共和主義の要素はヒュームには少ない，あるとしても基本的なものではないというのが著者の理解だからであろう。

著者は共和主義を通俗的ウィッグ主義の下位概念とみなしているように思われる。開明君主制論も生活様式論も自然法思想を基礎にして生まれたというのが著者の理解だからである。しかし，著者が尊敬するフォーブズは，ヒュームにも通俗的ウィッグ主義の言説を見いだしていた。そして，通俗的ウィッグ主義が著者の言うように共和主義と大きく重なるのであれば，フォーブズでさえヒュームに共和主義の思想の要素を認めていたことになるであろう。著者はヒュームのテクストに見られる，いわゆる通俗的ウィッグ主義の言語を一掃し，懐疑的ウィッグとして純化したのだが，しかし「開明君主制」の理論自体が，究極的には，イングランドの自由とフランスの隷従という通俗的ウィッグ主義の政体の優劣論を前提とするものであることを認めている。こうしてヒュームと共和主義の関係は，著者においては，不透明なまま残されている。

2，著者が本書で焦点をしぼったのは社会科学者ヒュームの「文明社会」論である。したがって，『人間本性論』は，ヒュームの社会科学の方法だけから取り上げられ，それ以外は捨象されている。『人間知性論』も宗教論も議論の対象からカットされている。こうして，『道徳・政治論集』の「開明君主制」の概念がまずクローズ・アップされ，それは懐疑的ウィッグ主義の最大のメルクマールとされる。続いて『政治論集』の経済論の基礎となった生活様式の概念にヒュームの独創性が求められ，「開明君主制」論からの理論的発展が指摘された。そして『イングランド史』ではヒュームの主知主義的な歴史理解の側面が強調され，最後にヒュームとウォーレスの「名誉革命の危機」をめぐる論争が詳細に論じられた。したがって，社会科学者ヒュームの「文明社会論」としては，『人間本性論』の第三部や『道徳原理の研究』はともかくとして，『政治論集』の政治論文がほとんど分析対象になっていないことは大きな欠落である。著者はなぜ『政治論集』の政治論文を省略したのだろうか。

3，著者は市民社会に代えて文明社会という言葉を用いた。そのことには，鋭い著者の言語感覚，歴史感覚が示されている。しかし，にもかかわらず著者の文明社会の概念の用法と説明には疑問がある。著者は『政治論集』は「文明社会の一般理論」を展開したものだと言う。しかし，文明社会とはここでは大ブリテンとフランスとドイツなど（おそらくオランダは入るのだろう）だけのことであって，オーストリア，スペイン，ポルトガルなどは「農工分業モデル」があてはまらない，「文明社会への順調な転換を達成していない」(234) 地域として除外されるようである。だとすれば「文明社会の一般理論」とは何なのか。むしろ，著者が検出したのは文明社会の特殊理論というべきものなのではないか。イングランドにしても最初から文明社会であっ

たわけではないことは著者も認めている。イングランドにしても，理由があって，漸次的に，偶然も介入して，文明社会に転成したのだとすれば，オーストリアもまた文明社会に転成する可能性がある。その可能性を認めることができるものであって初めて「文明社会の一般理論」と言えるのではなかろうか。他のところで，著者は，文明社会の一般理論は特定の国民国家なり国民経済なりが特定の文明社会として形成される過程を実証的に解明するものではないと述べている。奢侈論，農工分業論，貨幣・貿易論は，例証としてヨーロッパの事例が豊富に取り入れられているものの，「高度に抽象化された一般的原理」であり「理念型」(264) であるとされる一方，「ヒュームのいわゆる貨幣数量説それじたいが，じつはこのような（生産的な生活様式の存在する――引用者）特有の社会類型を前提として初めて成立する理論であった」(235) という説明もある。特有の社会類型を前提とする一般原理とは，結局はイングランドから抽出されたものであるほかないであろう。

ヒュームがみずからの経済論を「文明社会の一般理論」と称したのではないから，このような疑問は著者に向けられるものである。啓蒙知識人は文明の発展の自然な趨勢を跡づける歴史を「推測的歴史」だとか「自然史」，あるいは「普遍史」と呼んで，好んでそのような歴史を描いた。個々の史実を越えて，全体としての人間社会が，あるいは人類がある種の法則性をもって未開から文明へと進歩を遂げてきたという意識をもっていた。そのような歴史意識の最高の産物とされているものが，生活様式の四段階説――採取・狩猟から遊牧，農耕，商業――である。ヒュームにはこの四段階説はないが，しかし「学問と技芸の興隆と進歩について」や『宗教の自然史』は「文明社会史」というジャンルに分類できる優れた論考であることは，改めて述べるまでもない。

ヒュームの『政治論集』は，ファーガスンの『市民社会史論』やミラーの『階級区分の起源』のような，典型的な「文明社会史」＝推測的歴史の著作ではない。しかし，推測的歴史の方法が駆使されていることは明らかである。著者はその方法の適用に鋭く肉薄した。ヒュームが『政治論集』でめざしたのは，文明社会の一般理論であるというよりは，近代社会の原理の確立であると述べたほうが誤解が少ないかもしれない。しかし，著者はあえて文明社会の語を用いた。改めて，著者の文明社会の語の用法を吟味してみなければならない。

4，まず文明社会と文明社会論という表現はどう違うのだろうか。普通は前者は実体を意味し，後者は論議を意味すると思われるが，著者の用語法はやや特異である。まず，「ヒュームの文明社会」は本書のタイトルであるが，「基本的視角」(27) であると言われている。ヒュームのテクストを「文明社会論」として読むということであろう。さらに「文明社会論」は，『人間本性論』以後の著作の「基本的性格」(27) であると言われる。これは視角とはちがって，テクスト自体の性質を言っているものと思われる。続いて，ヒュームの社会科学的諸著作が「文明社会」という「統一的な視野」(28) のもとに扱われる，と

も述べられている。この視野とは著者の視野であろう。視野と視角は関連していても違うと思うが，著者の用語法では，視野は視角によって限定されるから，同じ意味として使われているのだと思われる。彼の全作品には「文明社会論としての基本的性格」(29) が刻印されている，と繰り返されている。本書の鍵概念とも言うべき「文明社会のイメージ」，彼の「文明社会像」(29) は徐々にできあがったという説明もある。

以上，要するに「文明社会論」はヒュームのテクストの基本性格であると繰り返されているから，これが著者のもっとも言いたいことであろう。「文明社会」のほうは，今まで見た限りでは，逆に実体ではなく，著者の視野ないし視角のようであるが，これはちょっと理解が困難である。

「あとがき」をみれば，「本書の主題と分析の視角はヒュームの文明社会像の究明に限定される」(371)，とまず述べられている。論と像は違うように思うが，著者は同じように使っている。主題と分析視角が同じものというのも，判然としない。つづいて「それはヒューム思想の社会科学的側面を軸に構成される彼の文明社会像の輪郭と基本的内容を解明しようとするものである」と述べられている。「それ」が本書を指すことは，明らかだが，「構成される」という表現に曖昧さがある。ヒュームが構成しているのか，著者が再構成して構成するのか，判然としない。

続いて書名に「ヒュームの文明社会論」ではなく「ヒュームの文明社会」を採用した理由は，ここでの「文明社会」が「ヒュームが学問的に分析し総合した文明社会の思想像」であるとともに，「彼が全身で生き抜いた18世紀のブリテンとヨーロッパの文明社会そのもの」(371) であったからだ，と述べられる。これは先程みた説明と違っている。「文明社会」はもはや著者の基本視角ではなくて，実体概念であり，ヒュームの文明社会像であるというのだから，文明社会論と同じだと言われていることになる。これでは文明社会と文明社会論（文明社会像）を区別した意味がなくなってしまう。

実は，著者は視角と視野を区別しないように，基本視角と分析対象を区別していない。したがって文明社会と文明社会論は，区別があるようでないのだ。像と論の区別もない。ヒュームの方法の厳密さを強調する著者にして，この用語法のあいまいさはどうしたことだろうか。

しかし，筆者はあえて針小棒大な議論をしたのであって，この点に重大な問題があるとは考えていない。本質的な問題は，著者が「市民社会」をやめて「文明社会」を採用したことである。その理由はすでにふれたように，きわめて明瞭に「あとがき」に述べられている。その説明は筆者には基本的にほとんど異論のないものである。それゆえに，逆に著者の「文明社会」と「文明社会論」の説明のあいまいさは残念である。

5，著者が尊敬してやまないフォーブズの「通俗的ウィッグ主義」，「懐疑的ウィッグ主義」の概念は，エンゲルスの空想的社会主義と科学的社会主義の峻別，優劣論に似たところがあって，政治的レッテルに類した卑しさ

がある。あるいは，エリーティズム臭があると言ってもよい。懐疑的ウィッグという表現自体はヒュームの発言から取ってこられたのだからそれ自体の問題性はないが，通俗的ウィッグ主義という概念は，おそらく著者はそうは考えていないだろうが，急進派，カントリの思想と運動の意味と意義をおとしめる傾向をもつように思われる。通俗的ウィッグ主義と言われている思想といえども，そのすべてが荒唐無稽なイデオロギーなのではなく，名誉革命体制と自由を守ろうとする思想として，それなりの実践的意義があったのではないだろうか。それを通俗的と称することの意義はどの程度あるのだろうか。懐疑的ウィッグは，最大数えても，ヒューム，スミス，ミラーだけであろう。著者はミラーを通俗的ウィッグとして批判すべきものとしているから，結局，著者が尊敬する思想家はヒュームとスミスだけということなのだろうか。まさかそんなことはないと思うが，通俗的ウィッグという概念には，このような予想を越えた（？）効能がある。わたしたちは操作的概念として，もっと誤解の余地の少ないものを，模索ないし，創出する必要があるように思われる。その意味で，著者が，フォーブズの操作概念に安住したのは，今となっては物足りない。著者はフォーブズの概念の限界——それは政治学の限界の指摘に等しい——も指摘しているけれども（308），著者のヒューム『イングランド史』解釈は，ヒュームは『イングランド史』段階でも立法者神話ならずとも，立法者論を必ずしも超え出ていないことを意味するものではないだろうか。

著者は『政治論集』解釈において，フィリップスン流の「生活様式」論を援用することによって，ついにフォーブズからの離脱を成し遂げたように思われるけれども，その前段階までにおいて著者のフォーブズへの依存は際立っている。スコットランド啓蒙理解においては著者はロバートスンの優れた総括を踏襲しているが，その総括は，本論に十分に利用されたようには思えない。最近の英米のヒューム研究で，著者ほどフォーブズの概念に依存しているものは見当らない。そのことと著者の共和主義評価とは裏腹の関係にある。著者はヒュームの文明社会には共和主義はいらないという。しかし，共和主義的徳，公共精神をもった，責任感の強い，自制心のある市民がいなくて，社会は幸福なのだろうか。「勤労・知識・自由」という概念のトリオは，ヒュームの最重要なキーワードであると著者は理解しており，筆者もそれに基本的に賛同するけれども，その自由には人格的自由と市民的自由がともにもりこまれているであろう。そして市民的自由は，消極的自由だけではないと，筆者は考える。専制政治に対して断固とたたかうという自由の精神がなくてはならないと考える。

筆者は共和主義を古典古代にのみ適合性があったに過ぎない，過去の硬直した思想だとは思わない。テューダー朝，ステュアート朝を通して，国民の自由が拡大していったことには，専制政治との闘いも折り込まれていた。確かにヒュームは専制政治との闘争を強調してはいないし，ピューリタンやコモンウェルスマンに特段の共感を抱いていたわけではな

いと思われる。しかし，ヒュームは専制政治に対する国民の抵抗は正当であると考えるウィッグであった。著者は抵抗権もまた通俗的ウィッグの武器だったとでも言うのであろうか。抵抗権の行使は，ヒュームの時代には，ジャコバイトの反乱はその歪曲であり，論外だとできようから，おそらくは共和主義的徳の実践に他ならないであろう。この時代まで共和主義も時代の変化に対応しながら息づいてきたのである。実際，18世紀には共和主義の伝統にも革新が見られた——たとえば，ネオ・ハリントニアンは反商業ではなかった——ことは，ポーコック自身の大著が分析して教えたことである。共和主義の精神はスミスもそれなりに尊重したものであるし，ヒュームもまたすべて退けたものではなかったことは，「理想の共和国案」を顧みれば，明らかである。また政治腐敗を制度問題として処理しようというのが，ヒュームの基本的スタンスであったけれども，制度問題ですべてよしとはヒュームといえども考えることはできなかった。人間の主体的能力はヒュームも重要と考えていた。

このように考えてくれば，著者はポーコックと共和主義から学ぶところがあまりにも少ないように思われる。それはなぜであろうか。この時代の思想の歴史家としては共和主義にもっと注目してしかるべきだと思われるが，どうだろうか。

著者が今回は議論の対象としなかったことにいささか立ち入ってしまったかもしれない。大著とはいえ，著者が扱ったのは「ヒュームの顔」の一面だけであった。その一面も時代とともに変容を遂げ，成長した。著者は次にヒュームのどの顔をどのように描いて見せてくれるであろうか。大いに楽しみである。

（京都大学経済学研究科教授）

関 連 文 献

天羽康夫『ファーガスンとスコットランド啓蒙』勁草書房，1993年。
板橋重夫『「人間の科学」と宗教』東京法令出版，1995年。
内田義彦『経済学の生誕』未来社，1953年。
大野精三郎『歴史家ヒュームとその社会哲学』岩波書店，1977年。
大森郁夫『ステュアートとスミス』ミネルヴァ書房，1996年。
香内三郎『活字文化の誕生』晶文社，1982年。
桂木隆夫『自由と懐疑——ヒューム法哲学の構造とその生成』木鐸社，1988年。
神野慧一郎『モラル・サイエンスの形成』名古屋大学出版会，1996年。
小林昇『重商主義解体期の研究』未来社，1955年
小松春雄『イギリス保守主義史研究』御茶の水書房，1961年。
斎藤・田中・杖下編『デイヴィド・ヒューム研究』御茶の水書房，1987年。
佐々木武「『スコットランド学派』における『文明社会論』の構成(1)～(4)」『国家学会雑誌』85-7・8～86-1・2，1972-3年
佐々木純枝『モラル・フィロソフィの系譜学』勁草書房，1993年。
篠原久『アダム・スミスと常識哲学』有斐閣，1986年。
竹本洋『経済学体系の創成』名古屋大学出版会，1995年
只腰親和『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版，1995年。
田中正司『アダム・スミスの自然法学』御茶の水書房，1988年。
田中敏弘『マンデヴィルの社会経済思想』有斐閣，1966年。
————『社会科学者ヒューム』未来社，

1971年。
――――『ヒュームとスコットランド啓蒙』洋晃書房，1992年。
田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究』名古屋大学出版会，1991年。
――――『文明社会と公共精神』昭和堂，1996年。
永井義雄「通俗ウィグの近代初期文明批判――ウォレス再論」『過渡期の世界』日本経済評論社，1997年，所収。
新村聡『経済学の成立――アダム・スミスと近代自然法学――』御茶の水書房，1994年。
羽鳥卓也『市民革命思想の展開』御茶の水書房，1957年。
舟橋喜恵『ヒュームの人間科学』勁草書房，1985年。
星野彰男『市場社会の体系――ヒュームとスミス』新評論，1994年。
山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書，1997年。
渡部峻明『ヒューム社会哲学の構造』新評論，1985年。
Agnue, J. C., *Worlds Apart: The Market and the Theater in Anglo-American Thought, 1550-1750*, Cambridge U.P., 1986.（中里壽明訳『市場と劇場』平凡社，1995年。）
Berry, C. J., *The Idea of Luxury: A Conceptual and Historical Investigation*, Cambridge U.P., 1994.
Bryson, G., *Man and Society, The Scottish Inquiry of the Eighteenth Century*, Princeton U.P., 1945.
Campbell, R. H. and A. Skinner eds., *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh: John Donald, 1982.
Capaldi, N. and D.W. Livingston eds., *Liberty in Hume's History of England*, Kluwer Academic Publishers, 1990.
Forbes, D., Scientific Whiggism: Adam Smith and John Millar, Cambridge Journal, Vol. 7, 1954, now in *Adam Smith Critical Assessments*, ed. by J. C. Wood, Vol. 1, 1984.
――――, *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge U.P., 1975.
Hont, I. and Ignatieff, M. eds., *Wealth and Virtue, The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, 1983.（水田洋，杉山忠平監訳『富と徳』未来社，1990年）
Mossner, E. C., *The Life of David Hume*, Oxford U.P., 1954, 2nd ed. 1980.
Norton, D. F. ed., *The Cambridge Companion to Hume*, Cambridge U.P., 1993.
Norton, D. F. & M. J. Norton, *The David Hume Library*, Edinburgh, 1996.
Phillipson, N., *David Hume*, London: Weidenfeld & Nicholson, 1989.
Phillipson, N. and R. Mitchison eds., *Scotland in the Age of Improvement*, Edinburgh U.P., 1970.
Pocock, J. G. A., *Virtue, Commerce, and History*, Cambridge U.P., 1985.（田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房，1993年）
Rendall, J., *The Origins of the Scottish Enlightenment 1707-1776*, MacMillan, 1978.
Robertson, J., *The Scottish Enlightenment and the Millitia Issue*, John Donald, 1985.
Sher, R., *Church and University in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U.P., 1985.
Stewart, John B., *Opinion and Reform in Hume's Political Philosophy*, Princeton U.P., 1992.
Tully, J. ed., *Meaning and Context, Quentin Skinner and his Critics*, Polity Press, 1988.（半澤孝麿・加藤節編訳『思想史とはなにか』岩波書店，1990年）
Winch, D., *Adam Smith's Politics*, Cambridge U.P., 1978.（永井義雄・近藤加代子訳『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房，1989年）
（お断わり：文中の敬称は省略させていただきました。）